

ヨハン・マッテゾンの音楽論：音の感覚的認識を通じた形而上的展開

松久保（米良），ゆき

<https://hdl.handle.net/2324/4784377>

出版情報：九州大学，2021，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	米良 ゆき			
論文名	ヨハン・マッテゾンの音楽論 ——音の感覚的認識を通じた形而上的展開——			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	東口 豊
	副査	九州大学	教授	井手 誠之輔
	副査	九州大学	教授	小黒 康正
	副査	東京大学	准教授	吉田 寛

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、18世紀前半に活躍した音楽理論家として知られるヨハン・マッテゾン(Johann Mattheson, 1681-1764)の著述活動を総覧し、従来大きな転換があると見られてきた前期・中期と後期のマッテゾンの思想の間に、「感覚」を鍵として通底するものを見出そうと試みたものである。

これまでマッテゾンは、後期バロック音楽の研究の一環として、音楽情念論(Affektenlehre)や音楽修辞学の音型論(Figurenlehre)の部分だけを切り離して言及されることが多かった。しかしマッテゾンは自ら作曲し音楽理論書を著す一方で、長年外交官として英国大使の秘書を勤めていた関係でイギリスやフランスの思想や科学の最新情報に触れる機会が多く、それをドイツに紹介していた啓蒙思想家の一面もある人物であった。その文脈を考慮して彼の思想を考えると、数を原理としてそこから演繹的に調和の理論を構築しようとしたピュタゴラス派以来の数学的音楽論を批判するとき、重要なのはジョン・ロックの経験論的認識論やフランス王立科学アカデミーのメンバーによる音響学的研究であった。実際の音という現象を「感覚」によって捉え、その経験に基づいて音楽の良し悪しを判断するべきというマッテゾンの主張は、ラ・モット・ル・ヴァイエの懐疑主義やニコラ・ファレの「オネトム」などを經由して受容したフランスの趣味論、とりわけギャラントの美学における形而上的な諸規則の批判と、「よい趣味(bon goût)」「健全な判断(gesundes Urteil)」や作曲家に求められる「巧みさ(Geschicklichkeit)」「適切さ(decorum)」といった実践知の重要性の指摘に加え、イギリスの道德週刊誌『スペクテイター』(*The Spectator*)の翻訳を通じて1720年代からハンブルク・オペラの批評などで使われるようになった「高貴な単純(edle Einfalt)」が示す音楽の自然性や聴覚上の快の議論へと繋がって行く。

ここまでの前期・中期の音楽論におけるマッテゾンの感覚主義の議論は明瞭である。しかし、前・中期で、形而上学的原理から導かれた音楽論を否定し情念の喚起による魂の徳の促進を音楽の目的としたマッテゾンが、後期の著作で「天上の音楽」や無限の議論など、凡そ現実の音響の感覚に基づく経験論的認識論から転向したように見えるのは何故だろうか。それに関して本論文では、前・中期において「感覚」は理性や悟性に勝る魂の働きの一部であったのに対して、後期においてマッテゾンは神の啓示を受け取る身体の宗教的意義を積極的に擁護したという違いがある一方、身体と魂、此岸と彼岸を繋ぐものとしてヴァイエから引用した「扉」という前期の比喩は、物質的に実体を持たないという音の形而上的性質に着目した後期においても聴覚が有限性を超えて「霊的なもの」を認識するという「感覚」観と共に継承されていることを指摘した。そのことから導かれる、後期においては経験論的感覚論の直接の言及は見られなくなるものの、マッテゾンの音楽の目的論において「感覚」が極めて重要な意義を持っていたことに変更はなかった、という結論は大変興味深い。

本論文は、ヨハン・マッテゾンの思想を一部のトピックに限定して論じるのではなく、その全貌を明らかにしようとした点で意欲的なものである。その過程の中で、ハンブルクを中心とした知識人サークルとマッテゾンの関係や、今まであまり言及されたことのない引用元の指摘など、音楽学の領域のみならずドイツ文化史やカントに至る 18 世紀前半の思想史の研究としても意義を認められよう。マッテゾンの活動を貫く「感覚」重視の態度の指摘だけでなく、その間にあった思想の変遷やそれを引き起こした状況など残された問題もあるが、今後更なる研究の発展が見込まれる点で本論文は豊かな広がりを持つと言える。以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）を授与されるのに十分な能力を持つことを認めるものである。